

## 生活環境が子どもの健康におよぼす影響に関する研究 総括研究報告

松田 一郎

要約：(1) 高層住居は妊娠・分娩・育児に問題をもっている。母親の喫煙は同居する子どもの呼吸器疾患のみならず、問題行動にも関与している。(2) 子どものファーストフード、清涼飲料水の摂取はその偏った栄養素内容のため健康を損なう恐れがある。(3) テレビ、テレビゲームは子どもの生活時間帯のかなりを占め、適当な指導を行わないと健康を障害する可能性がある。(4) 骨形成によって思春期は重要な時期で、この時期の不適切な対応は、成人、老年の骨異常の要因となる。(5) 子どもの事故の実数を握むため常設のモニタリングが望まれる。また事故防止には介入研究が必要である。

見出し語：生活環境, 食生活, 学習環境, テレビ, 骨折, 事故

### I. はじめに

子どもをとりまく生活環境の変化が、子どもの心身にどのように影響をおよぼしているか、この問題を検討し、対策を立てることを目標として研究が行われた。実際にはこうした環境の変化は不可避のものであり、それだけに単に負の影響を探るのではなく、正の影響にも目を向けたいと考えた。これまでにもこうした問題はいろいろの処で指摘されているが、大事なものは数量で示された批判に耐えるものであることを自覚して研究を進めたい。

1. 居住環境と子どもの健康 (松田一郎)
  2. 食生活(清涼飲料水, ファーストフード)と子どもの健康 (藪田敬次郎)
  3. 学習, 遊び(学習方法, テレビゲーム, テレビ)と子どもの健康 (谷村雅子)
  4. 成長(骨折予防)と子どもの健康 (清野佳紀)
  5. 小児の事故とその予防 (田中哲郎)
- である。各分担研究のリサーチクッションは、それぞれの報告に記載した。

### II. 研究グループの構成

研究は次の5つの分担研究に分けて行われた。

### III. 研究方法

まず各分担研究者は、それぞれの研究項目につ

いて国の内外の研究情勢をレビューし、研究の必要性と方向性を探り、さらに独自の研究方法（アンケート調査、機器による計測など）を組み合わせて問題の解明にあたった。

#### IV. 結果と考按

(1) 高層住居に居住している妊婦では、流・早産などの異常分娩が高率に認められ、また育児問題についての不安も高率に存在することが判明した。幼児の行動についても問題のあることが指摘されている。しかし、知的発育は高層居住の幼児の方が低層居住の幼児よりも高かった。これらの所見はこれら幼児の母親との接触時間が長くなることと関係があると思われ、一過性のものと判断した。事実就学児童ではこういう差はみられていない。母親による受動喫煙は父親によるそれよりも、同居する子どもに与える影響が強く、呼吸器感染のみでなく、問題行動（主としてまわりの子どもとの協調性）についても有意に関与している結果が得られた。但しこれを煙草の影響ととられるか、喫煙習慣をもつ母親の行動遺伝ととらえるかは今後の問題である。喫煙量との関係など明らかにすべきである。

子どもの通学時間と健康の関係をみると、公立小中学校（通学距離は6 km以内）では長距離通学ほど健康について正に働き、国立・私立（通学距離は公立より遠い）では逆に、長距離通学は健康に負に働くことがわかった。

(2) ファーストフード（ハンバーガー、フライドチキン、サンドウィッチ、インスタントラーメン、フライドポテト、スナック）と清涼飲料水（1缶約100kCalの糖を含む）の消費量はいく

つかの調査で増加の傾向にあり、このことから子どもの個人摂取量も増加していることが伺われる。なかにはこれらが普通の食事の中に組み込まれていることもあり、そうなると、これらのファーストフードの栄養素が問題になる。特に脂肪含有量が高く、全カロリーの30%を越えることもあり得る。

また、行動面にも問題をもたらすことも指摘される。

(3) テレビ、テレビゲームに使用する時間が長ければ長いほど、運動・学習・睡眠に要する時間が短くなりそれぞれによる健康障害、学習障害の要因になり得る。テレビゲームは視機能訓練などに応用できる面もあるし、内容によっては教育的なものもあり、評価できる面もある。しかし一般に内容は興味本位であり、しかも最近は内容には暴力、性、犯罪描写のものまであり、軽視できない。また1人遊びになることが多く、他の子どもとのコミュニケーションの場を狭くする危険もある。広い意味を含んだガイドラインを将来作るのが望ましい。

(4) 子どもの骨折はこれまでの調査では増加傾向にある。勿論これには、前方視的な研究が不可欠である。子どもの骨塩量を測定したところ男子も女子も、欧米での成績と同様、年長児になるに従い、年々増加しているが、骨折の経験を有する子ども、ダイエットの経験者では明らかに骨塩量が低い。

骨が形成されるのに critical point があり、それが思春期(最も骨塩量が高くなる時)であると思われる。その時期を過ぎると年々低下傾向にあるので、この時期に適度の運動指導、カルシウム

摂取量を損なうことのないような食事指導が必要である。

(5) 子どもの事故が、子どもの死因のなかでかなりの部分を占めるようになってきたことに関連して、その防止策が検討された。これにはまず事故、特に死と直結するような事故の実態をつかむこと、次に何らかの予防策をどう地域住民に知らせるかもまた問題である。介入研究で20%減らせるためには3,300人の人口(小児人口)が必要であり、目下この地域選定を終えたところである。

#### V. 今後の問題

それぞれの分担研究のテーマは一樣ではないが、最終的には具体的に、例えば基準作り、指導要項作りなど、“実際に役立つ成果”を目指して研究して来た。残念ながら現在までの解析では、まだそこまでには至っていない。それはこの分野でのこれまでの研究がかなり遅れていたことにもよることにもよることを指摘しておきたい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:(1)高層住居は妊娠・分娩・育児に問題をもっている。母親の喫煙は同居する子どもの呼吸器疾患のみならず、問題行動にも関与している。(2)子どものファーストフード、清涼飲料水の摂取はその偏った栄養素内容のため健康を損なう恐れがある。(3)テレビ、テレビゲームは子どもの生活時間帯のかなりを占め、適当な指導を行わないと健康を障害する可能性がある。(4)骨形成によって思春期は重要な時期で、この時期の不適切な対応は、成人、老年の骨異常の要因となる。(5)子どもの事故の実数を握むため常設のモニタリングが望まれる。また事故防止には介入研究が必要である。